

## 野田城跡と長篠城跡の見学

3年前に長篠設楽原の馬防柵など戦場跡を見学したのに引き続き、長篠城跡とその戦の3年前に武田信玄が攻め落とした野田城跡を見学しました。奥三河ふるさとガイドの高田さんが説明してくれましたが、とても分かりやすくうまい案内で感心しました。

### 長篠城跡見学

#### 1 長篠の戦いは何故おきたのか

はじめに「長篠の戦いを巡る大人の修学旅行」という冊子を各自いただきました。それには当時の背景、織田・徳川軍がいかにして武田軍を打ち破ったのかについてまとめられており、これがあれば戦の概要が理解できとても参考になりました。

長篠の戦いは、1554年に織田信長が初めて鉄砲を使った村木砦の戦い、そしてその6年後の1560年桶狭間の戦い、さらに15年後の1575年に武田勝頼が長篠城を攻めた戦です。それは武田信玄が野田城を落として帰路の途中に亡くなってから3年後のことです。

##### ① 天正3年(1575)武田勝頼は長篠城を攻める

武田勝頼は勢力を東海地方へ伸ばすため15,000の兵を率いて長篠城を囲み、時の城主奥平貞昌は城兵500でこれに対峙しました。5月8日以降武田軍は激しい攻撃をかけ、城兵はよく応戦しましたが城中には4,5日分の食料が残っているのみとなり、落城は必至となりました。貞昌は危機打開のため軍議を開き家康への救援要請を決め、5月14日鳥居強右衛門が夜陰にまぎれて城を脱出し、岡崎の家康に援軍を請い使命を果たします。再び城に戻るときに捉えられて、「援軍来たらず」と報告するように強要されますが「援軍近し」と告げ、16日夕刻に磔となりました。

##### ② 武田勝頼は重臣の進言を退け、織田・徳川軍との決戦を選択

このことから重臣たちは一旦退却すべし、と勝頼に進言したものの勝頼は何故決戦を選択したのか。勝頼の心の中に踏み入ってみると、武田家における信玄は絶対的な存在であったので、何かにつけて信玄と比べられてしまい、勝頼としては父に代わり「さすが勝頼さま」と言わせなくてはと思っていたに違いありません。そのため、重臣たちの意見に反する選択をしてでも、ひと花咲かせる決意だったに違いありません。

##### ③ 勝頼は長篠城の抑えに3,000の兵を残し、設楽原に進撃した

織田・徳川連合軍の堅陣、設楽原に主戦場を移し決戦が開始されるのでした。21日設楽原に進撃し連吾川に沿って陣地を築いた連合軍は、火縄銃という新兵器と馬防柵と鉄砲隊という戦術で圧勝しました。この戦いは斬新さ、合理性を追求した信長と、伝統に固執した勝頼との激突であり、新時代性と旧時代性との対決でした。

以上がこの戦いの経過とその特徴を要約したものとと言えます。

#### 2 織田・徳川連合軍はいかにして武田軍を打ち破ったのか

##### ① 当時の状況は?

当時の状況を見てみると、武田信玄の死去により織田・徳川包囲網は破綻し、織田信長は攻勢にでて

将軍足利義昭の紀州追放。浅井家朝倉家の滅亡。加賀・長嶋一向一揆のせん滅。松永久秀滅亡、織田信長の敵対勢力は西本願寺・中国毛利家となり、兵力に余裕が出来、三河侵攻の武田軍に対し大軍を派遣することが可能となった。武田勝頼の遠州・三河侵攻により徳川家独力では抗しきれず、徳川家康は領国経営の危機にあった。

## ② 織田軍の優位性

- ・堺を通じて豊富な火薬と堺・国友から大量の火縄銃を調達、一方武田軍は火縄銃を所持するも火薬の輸入が思うに任せない。
- ・兵農分離の進んだ軍隊は、一年中どこへでも転戦して戦が出来る。一方武田軍は農民兵主体で農繁期には戦が出来ない。
- ・兵力が多い、但し武田軍は騎馬中心の野戦の攻撃力は、当時日本最強。
- ・信玄亡き後、勝頼と重臣たちとじっくりいってなかった。勝頼は「頼」の字が示す様に諏訪の後継者として育てられた。息子義勝が家督を継ぐまでの後見人の立場であった。勝頼は相次ぐ戦で軍功を重ねることで、後継者の立場を誇示し、武田家頭領としての立場を強固なものにしようとした。しかし、相次ぐ軍役で農民も領国も疲弊し、不満の声が上がっていた。

## ③ 戦の目標と戦略

織田軍は損傷を最小限にとどめ、武田家に打撃を与えて美濃、遠州、三河から武田の圧力を排除することであった。そのための戦略は以下のようなものであった。

### ★決戦場の選定

- ・家康との軍議により設楽原と決定。山より川までの南北の距離が2 km、前に連吾川を当て弾正山と高松山の南北に連なる台地があり、大軍を隠し展開できる原がある。

### ★戦場の部署の決定

- ・防御性が高く退路が容易に確保できる山よりに織田軍、平面の原があり武田軍の攻撃に最もさらされる危険な部署に徳川軍を配置。

### ★戦術の徹底

- ・織田・徳川の全軍が織田信長の命令に従うこと。指揮官のみ乗馬で、他の武将・雑兵はすべて徒歩で戦う。これは火縄銃を有効に使うため。
- ・防御陣地から出て武田軍と戦ってはいけない、鉄砲隊であしらうこと。

### ★情報戦などその他の戦術

- ・武田勝頼に勝利を確信させるために、戦が始まったら寝返るので取り立ててほしいという密書を送っている。馬防柵構築のための木材と縄を用意した。織田信長傘下の武将に鉄砲隊を供出させる手配りをしている。
- ・設楽原への進軍は、武田軍を恐れて戦いたくないようにわざとゆっくりした。
- ・設楽原に到着しても陣城の築城に専念し、陣城にこもって居すくまったように見せた。
- ・鳶ヶ巣山奇襲攻撃(5 砦攻撃)で、長篠城包囲軍を駆逐し武田軍の退路を断つ。

## ④ 戦の結果とその後

- ・鳶ヶ巣山の奇襲により退路がふさがれ、全面突破しか方策がなく、武田軍は織田・徳川軍の堅い守りの防御陣地に対し、前線で波状攻撃を5～6時間仕掛けるも、攻撃力を失い退却する。これを織田・徳川軍は追撃し、武田軍は多数の戦死者をだした。

- ・様子見に美濃の岩村城、遠州の高天神城を攻撃し容易に織田・徳川軍は奪還する。
- ・武田家譜代の木曾義昌、穴山信吾に内応の手を差し伸べたところ、これに応じるなど武田家の家臣団もばらばらになり、互いに疑心暗鬼に陥っている。
- ・武田勝頼は上杉謙信の相続争いに、上杉景勝につき、北条家と敵対関係になる。勝頼は四面楚歌状態で武田領国は崩壊寸前。

### 3 長篠合戦図屏風に見る両軍の配置

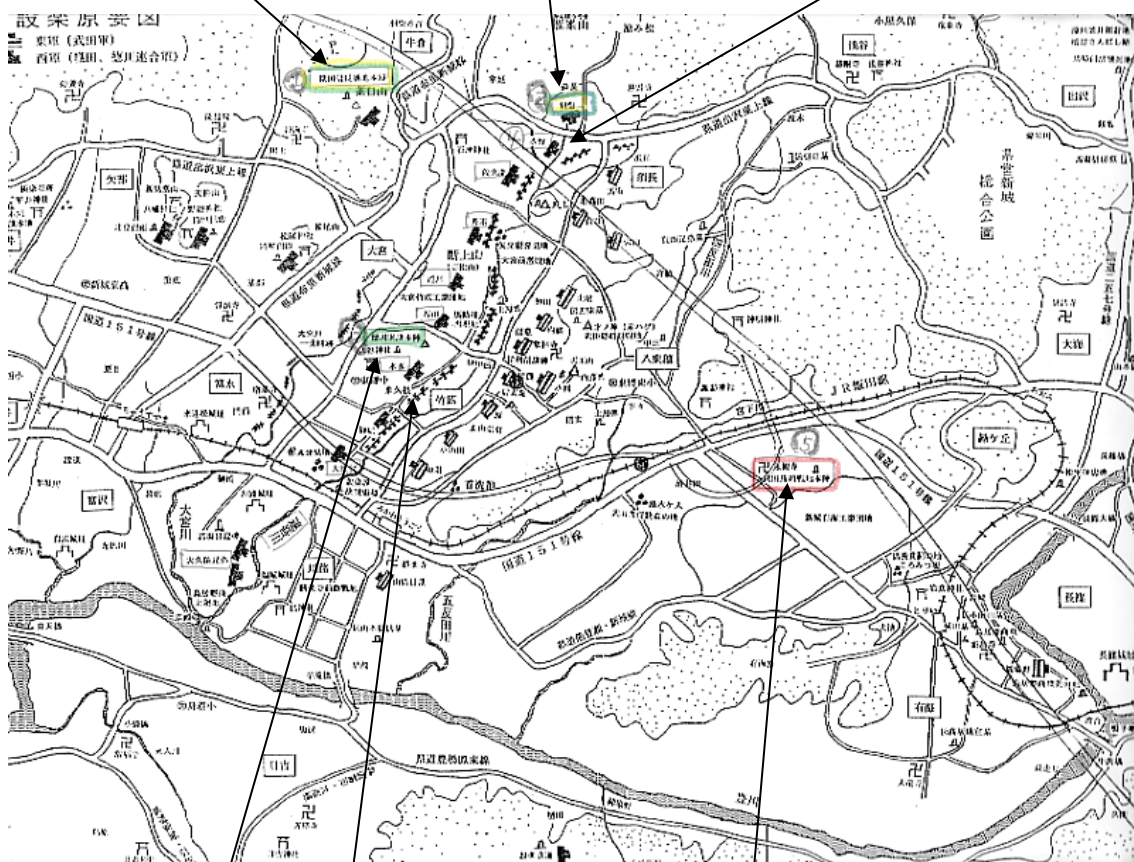
下図は3年前にいただいた資料で、次のページは今回いただいた資料。

天正3年5月21日(1575年6月29日)織田軍・徳川軍と武田軍の布陣

織田信長の本陣

羽柴秀吉の陣

水野忠重の陣



徳川家康の本陣

馬防柵の印

武田勝頼本陣

織田信長軍の主な武将

... 織田信忠 柴田勝家 丹羽長秀 明智光秀 羽柴秀吉 佐久間信盛  
前田利家 滝川一益 水野忠重

徳川家康軍の主な武将

... 松平信康 石川数正 本田忠勝 大久保忠世・忠佐・忠教兄弟 高木  
清秀 成瀬正一 平岩親吉

織田・徳川方 38.000人 死者 60未滿 (ウイキペディアより)

武田方 18.000人 死者 10.000~12.000人

戦死した主な武将.....土屋正次 内藤昌豊 甘利利康 山県政景 真田信綱 原昌胤  
真田昌輝

# 犬山城白帝文庫蔵

## 「長篠合戦図屏風」の謎解き

絵図に描かれた人物、表現された事柄は何を意味するのだろうか？



武田軍

織田・徳川連合軍

### 【基礎知識】

●「長篠の合戦」があったのは、西暦1575年(天正3年)

●屏風の製作年代

西暦1655年(明暦2年、戦後80年)以降

樹法や人物の表情の描写(江戸狩野派)から、

1673~1680年(延宝)の頃

●この屏風は、1622年(元和8年)出版「甫庵信長記」、1655年(明暦2年)開版「甲陽軍艦」、「松平記」を基に描かれている。

●この屏風は、江戸の人々に面白く読んでもらうために出版した歴史小説(軍記物)「甫庵信長記」(戦後47年)や、信玄時代賛美、勝頼体制批判、勝頼が重用した重臣、長坂釣閑齋、跡部大炊助に対する糾弾が設定の主軸の「甲陽軍艦」(戦後80年)を基に成瀬家の祖先成瀬吉右衛門正の活躍を描いている。史実とは違うフィクションの世界である。

●屏風に描かれている、成瀬吉右衛門正は、一時、武田信玄に仕え、たびたび手柄を立てたので徳川家に召返され、長篠の戦いでは、物見御使番を仰せ付けられ敵の指物・紋などを良く知っていたので屏風絵図もかなり正確に克明に描かれている。

### 屏風絵図より読み取れること

① 決戦当日の5月21日以前の布陣から(織田信長・徳川家康本陣)当日武田勝頼が無事落ち延び、馬場美濃守信房の最後までを一枚の屏風に描いている。

② この屏風は、実戦体験者やその嫡男の死後作られている。戦後、時代を随分と下って(随分たつて)製作されたため、名前を間違えていたり、参戦していない人を登場させている。

(正)奥平九八郎貞昌(誤)奥平九八郎家昌  
(正)蜂須賀勝正(小六)(誤)蜂須賀家政  
参戦していない登場人物 水野惣兵衛忠重

③ 一人の武将が場所を変えて二箇所描かれている。

馬場美濃守信房

中央最下段戦闘中 旗(白地に黒山道)馬の頭 指物



最上段寒狭川右岸 二人から槍をつけられている最後

④ 陰陽師が同行していた？

徳川家康の供回り二人、安部晴明六星紋の陣羽織を着ている。大阪城天守閣蔵の屏風に織田信長の供回り三人も同様。

⑤ 当時は当世具足だが、大将有力武将は大鎧、鉄砲隊足軽は大袖で、実際とは相当かけ離れた武装姿で飾り立ててきらびやかに描かれている。

⑥ 武田軍も充分鉄砲の威力を承知しており、敵の前線をたたくため打撃力として多数の鉄砲隊と弓隊を編成しており、6時間〜8時間の進退の激闘を繰り返したのだが、織田・徳川連合軍の三千挺の鉄砲で武田の騎馬武将をばったばつたと撃ち倒したイメージを誇張するため、連合軍は多数の鉄砲が描かれているが、武田軍はわずか四挺、弓については一張りも描かれていない。

⑦ 長い間に名前の貼札が落ち、所有の成瀬家も人物の特定ができず、間違えて名札を貼っている。徳川家康の所に植村庄右衛門、水野惣兵衛忠重の所に佐久間右衛門信成、小栗大六の所に榊原小十郎康昌を貼っている。

⑧ 御使番

1. 徳川家康「五」の字の四半の旗  
成瀬正一？小栗大六（黒母衣衆）

2. 織田信長 黒母衣衆 野々村三十郎（絵では赤母衣）

⑨ 鉄砲隊指揮者

1. 徳川家康 日下部定好 成瀬正一？

2. 織田信長 前田利家 佐々成政 塙九郎右衛門 赤母衣衆 福富平左衛門（絵では黒母衣）

⑩ 織田軍・徳川軍・武田軍に同じような指物？背旗？を身に着けている人は何を指示する人か教えてください。織田・徳川連合軍側の武将は、前線に鉄砲を撃っている武将以外に織田軍側（敵側）を見ている様子です。

⑪ 「頑固（徹）鉄」の語源となった西美濃衆「稲葉鉄」が描かれている。（目の丸の旗、織田信長の近く）

⑫ 屏風に描かれていない薦ヶ巣山攻撃に参加した地元武将・奥平貞能（作手）・菅沼定盈（野田）・設楽貞通（設楽）・西郷家員（月ヶ谷）・阿部四郎兵衛（乗本）・豊田藤助（日吉）

長篠城址史跡保存館の説明には、織田・徳川軍の武将の名前に「水野」の名前がありませんでした。それだけ軽んじられているということでしょうか。それは歴史を後世に伝えるのに正確さを欠くことになり片手落ちです。長篠合戦図屏風で合戦の様子と両軍の配置を見てみると...

#### 4 長篠合戦図屏風とはどのようなものか

長篠の戦いがあったのは、西暦 1575 年、屏風の製作年代は 1655 年以降樹法や人物の表情の描写から 1673 年～1680 年の頃。1622 年出版「甫庵信長記」、1655 年開版「甲陽軍鑑」、「松平記」を基に描かれている。

この屏風は江戸の人々におもしろく読んでもらうために出版した歴史小説や、信玄時代賛美、勝頼体制の批判、勝頼が重用した重臣に対する糾弾が設定の主軸の「甲陽軍鑑」を基に、成瀬家の祖先成瀬吉右衛門正一を描いている。史実とは違うフィクションの世界である。成瀬吉右衛門正一は一時、武田信玄に仕えたたびたび手柄建てたので徳川家に召し返され、長篠の戦いでは物見・御使番を仰せ付けられ敵の指物・紋などをよく知っていたので屏風図絵もかなり正確に克明に描かれている。

##### ① 長篠合戦図屏風から読み取れること

- ・一人の武将が場所を変えて二か所に描かれている ⇒ 馬場美濃守信房
- ・名前を間違えている 奥平九八郎貞昌 ⇒ 奥平九八郎家昌 蜂須賀勝正 ⇒ 蜂須賀家正
- ・参戦していない水野忠重が描かれている ⇒ 忠重家臣の水野清久が参戦している(忠重は負傷中)
- ・大将・有力武将は実際とかけ離れたきらびやかな衣装で描かれている
- ・長い間に名前札が落ち、成瀬家も人物特定が出来ず、間違えて名札を張っている。
- ・陰陽師が同行していた? 徳川家康の供回りに安倍晴明六星の陣羽織を着ている

★この当時水野家は織田方に属していた、よって3年前にいただいた資料の秀吉の陣近くにいたのは理解できるが、今回の屏風図の家康の陣近くに配置されているのは解せない。

#### 5 長篠合戦と奥三河の土着勢力

##### ① 時代の波に翻弄された山家三方衆

作手の亀山城・奥平家、設楽の田峯城・菅沼家、長篠城・菅沼家を山家三方衆と呼ぶ。大久保忠教作の三河物語にも記載されている。この山家はその立場は弱く、それぞれが生き延びるために、人質をだすなど苦心惨憺であった。山家三方衆の運命を決定づけたのは長篠合戦であった。

合戦当時、作手奥平が徳川家康の命により、長篠城主として赴任。作手の亀山城は武田軍に謀反人として破却され、田峯菅沼家は武田方に属していた。

徳川に属し最後まで長篠城を守り抜いた奥平は、江戸時代には三河譜代の大名として存続。宇都宮藩などを経て中津藩(大分県)で明治維新を迎えた。一方、菅沼氏は衰退の一途をたどる。

##### ② 奥平貞昌は新城城を築城

長篠の戦いで功績をあげた長篠城主・奥平貞昌は、信長から「信」の一文字をもらって信昌(のぶまさ)と改名。家康からは長女・亀姫をめとり、新しい城「新城城」を築城しました。これが現在の新城市の始まりです。

★新城の人々は、戦死した武田武士の墓をきちんと守って花を手向けるなど、手厚い保護が今も続けら

れている。このことについて山梨県では長いこと知られていなかった。しかし、そのことが分かってから武田に関わりのある地域との交流が今も行われているという。(3年前の報告書の中の「信玄原の火おんどり」参照)

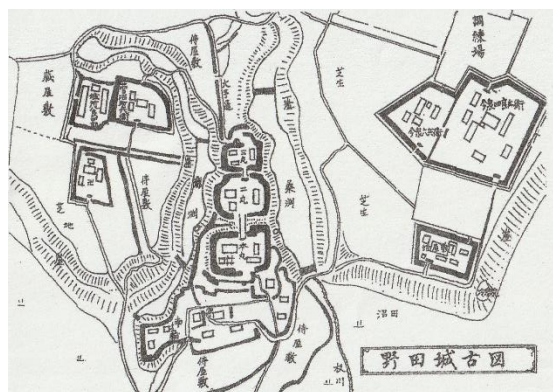
## 野田城跡見学

### 1 信玄が最後に攻めた「野田城」

野田城は永正13年(1516)～天正18年(1590)に城主の移封にもなって廃城となるまでの75年間にわたって存続したとされている。築城は三河地方で勢力を張った三河菅沼氏一族の菅沼定則で、はじめ今川方に属していた。城主は今川義元が桶狭間で戦死するまで、遠州と三河地域の狭間でその帰属先を転々としていたが、義元死後は徳川方となっている。

この地の北側には伊那街道が通り北は長篠城や信州や遠江方面に、南下すると吉田城がある東三河平野部に至る。つまり野田城は、東三河の山間部と平野部の中間地で街道を抑える拠点的な役割を果たし

ていたと考えることが出来る。



#### ① 城の規模

城跡は三つの曲輪が榴団子のように並び、その両側は竜淵と桑淵がお濠のような配置となっている。

諸国古城之図によれば曲輪1は60m×47m、曲輪2は50m×50m、曲輪3は40m×40mの規模となっている。

#### ② 信玄は井戸水を抜く断水戦術で攻めた

武田勢はこの城の備えが固く城兵の士気も盛んでなかなか攻め落とせない。そのため長期戦を覚悟し

て、まず竜淵・桑淵の水を落とし、甲州の金掘り衆を呼んで本丸の東と西から坑道を穿って、井戸水を抜く断水戦術をとった。一か月持ちこたえたが援軍も来ないので、城兵の命と引き換えに開城降伏した。



### 2 信玄は鉄砲に撃たれ鉄砲傷がもとで死んだ...

境内西側の丘に「信玄笛聞場」と伝えられる跡がある。

この戦いの時、伊勢山田の村松芳休という笛の名人が、城

内で毎夜笛を吹いた。妙なるその音色に敵味方共に感じ入った。城中の鳥居半四郎が堀端に紙をつけた竹の立ててあるのを見て、これにネライを定めて鉄砲を据えて待った。2月9日の夜、笛の音につられて人の気配があり、鳥居が引き金を引くと「大将が撃たれた」という声上がり、敵陣が動揺した。翌日、和議の矢文が城中へ届いたという。

一般には信玄の死は病氣説で、最後の地は信州駒場が定説となっている。また一説には野田城の戦いで鉄砲傷がもとで死んだとも言い伝えられている。宗堅寺にある13匁玉の信玄砲がそれだという。